



(183) 地 平 線

田所 陽子 (その 飛、二十歳、四郎のシムに於ては二十
歳の赤ん坊です)
田所 弘一 (博士の弟の子、二十六歳)
案内の老人 (内寮人、六十歳也)
その孫に當る少年バイラア (同 十三歳也)
舊××王府の若き王子 (同 三十歳也)
ラマ僧の長老その他

砂 漠

陰山脈の奥の 外帯に近い内帯の砂漠、四月の午後である。
日本内地の四月よりはすつと熱い。日は僅かに傾きかけて塵か大
きな光が斜めに、一面の砂漠に降りそそいでいる。
その砂漠の中に、深い一本の車の痕と動物の大きな足跡がある。
カメラ、僅かに近づくと、田所博士の蒙古探險隊の一行が通
りて行く。
一行は博士と令嬢陽子と若き長孫田所弘一の三人がラクダに乗る、
案内の老蒙古人とその孫と若きバイラアと云ふ十三四歳の少年とが沙
き、二匹の馬が荷物と鞍轡した荷車を牽いてゐる。博士は背旗にグー
トル、毛皮の防寒帽は外帯といふ如くにも華奢らしいタイプである。
陽子は毛糸の防寒帽に皮のシヤンペ、蹠底スポンに皮の長いあみ上
げ靴で風寒とした足袋である。弘一は防寒靴に皮のセーター(又は
ジャンパー)皮グートルをはいてゐる。これも近代的な明るさあつ
た青年である。
先頭のラクダの博士が陽子に、
博士「陽子、どうだ。もういふ川渡、砂漠にもおきたら？」
陽子「うん、一月や二月砂漠を歩いた位で悉くヤンペ、弘一
さん」
と後から馳して来る弘一「何を求める。」
弘一「全く、未來の考古學者にはなれませんが」
と弘一もその意氣を示す。
博士「ほう、二人とも嬉しいこと云ふぞ」
と博士はさぞ満足氣に笑ふ。
博士「この砂漠の果てまで行ける自信があるか？」
この言葉に陽子は果てない砂漠をどうと見つめやらセシヤンペル
に、
陽子「この砂漠の何處かに、お探險隊がに墜つてゐらうしやるの
ぞ」
その言葉に弘一が博士に、
弘一「叔父さん、陽ちゃんが何故砂漠に行きたがを判りませう」
博士は無言でうなづく。陽子は父に、
陽子「そぞ、お父さん、今夜も亦」

(184) 地 平 線

(206)

地——線——

平

その時、飛行機が博士の近くに降陸した。
機上から現れた弘一。博士一行の喜び。
陽子『まあ、弘一さん、お父さん、弘一さんよ』
と飛行機へ走り寄り喜ぶ陽子、博士。
弘一『陽ちゃん、歓迎さ』
博士『歓迎をしたな、弘一君』
陽子『どうしたの、顔が心配したのよ』
弘一『本當に心配かたですませました。僕もこんなことにはらう
とは思ひませぬした。
あの自動車に近づくべく、いきなり降だれて、それつまり覚えがない
心です。気がついた時は、博士君達の包の中へ着陸をされてるのだと
す。いくら降りたくても『着陸が少しも判らない』との機で逃げ
ならぬと』
博士『いや、無事ですか。本着にかつた』
その時、丘の麓から騎馬隊が、どつと進軍して来る。
一行は、はつとして目をなます。
それは内蔵兵だ。丘の東方へ進軍して行く。
弘一『外蔵軍の進軍に對して西蔵軍の進軍です』

大 フ カ ン
わつと上る騎馬軍の襲撃！ 全軍進軍の聲。

右翼、左翼から一列の襲撃行！
砂塵をけつて騎馬十騎、一齊に外蔵軍への進軍だ！
襲撃！ 襲撃！ 外蔵軍は國境を外侵する。
地上にある外蔵軍の旗を旗、進軍は西蔵軍陣地の足。

———
遂に外敵を退ひ散らした内蔵軍の行進が来る。
凱旋して来る内蔵軍。日の丸の旗を打ち振る博士一行。
先頭に来た將校が、博士に、
將校『あなたが田所博士ですか』
博士『そうです』
將校『御無事で結構でした』
博士『何にか』
將校『いや、外蔵軍の一寸した小競合でした』
と義氣高らかに笑つてから、
將校『田所さん、この青年に足場はあまりありませんか』
と後の青年を指さす。
その青年こそ王子だつた。博士は、
博士『是は』
青年は博士をしつと見てゐるが、
青年『先生、××です、先生』

地——線——

(207)

と盛進して近寄る。
博士『やつぱり、××だつたが、×××』
二人は相抱く。しほしは驚きのまゝだつた。
博士『立派になりました實に立派になりました。お父様をつくつた』
と肩をまだしつかり強く抱いて博士は嬉しく進んでゐる。
青年『先生、僕はお父様にお運び出来て、心なほ少しはあります。お父様は
本當に嬉しいです』
博士『私も、そんなに嬉しいか』
この二人の再會に、陽子は、
陽子『まあお父さん、お母さまがいりつたらね』
博士も無言どうなづく。
二十年の承き歲月を離れはなれたら女博士と王子の事實は、全團
的以上のものではつた。
それから幾日か経つて、

砂 漢
博士一行に王子も加はつて、探検の旅は続けられてゐた。
ラクダに跨つた王子は、先頭を歩く博士を見て、又傍を共に進んで
来ると弘一に、
王子『先生はヘラホトが飛出さないで去つてゐるからさう
な』

弘一『いや、そんなことはないですよ。たゞヘラホトが飛出さない
くとも、ホエも飛出さない』
陽子『さう、さうですわ。王子様には運び出さないで、お父
さんはとても満足して居りますもの』
この三人の語に、博士も、
博士『××さん、私はあなたに負けたことだけで、今世の旅はと
ても意義ある旅行でした。ヘラホトが飛出さないくとも、私の探
検旅行はいつまでも願ひのです。
この砂漠が際限がない様に、我々の研究にも際限はないのです』
と博士は學者らしい言葉だつた。
そして一行はこの果てなき砂漠に、限りなき研究の旅を續けて行く
のでした。
前進する一行。
地平線の彼方へ前進する一行。(終り)

次 號 掲 載 シ ナ リ オ	
告	沃 土 萬 里 (倉田文久郎先生作品)
告	木 石 (五五之助先生作品)
告	殘 菊 物 語 (藤田口健二先生作品)